ほんと、嫌になっちゃうよ……

ムーンガルド子爵

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ほんと、嫌になっちゃうよ……

【Ｎコード】
Ｎ２１６４Ｙ

【作者名】
ムーンガルド子爵

【あらすじ】
入れ違い勘違い幼馴染・結兎、翔、影利。
翔と影利の告白に戸惑う結兎。そして落胆。
影利による、翔への気持ちを結兎に伝えるものの……
こうなったらどうすればいいんだろう？

沈黙の静止

――なんで僕がこんなことで悩まなくちゃいけないんだろう？

「なんで、僕なんだろう……」

そう吐き出された言葉は、白いもやとなり虚空を舞った。

制服のブレザーははだけていて、もう服という役割をしていなかった。

「ほんと、嫌になっちゃうよ……」

苦悩の呟きは、やはり白く天に上り詰めるばかりだった。

○・○・○・○

「ひぃ～。今日もさみぃーなぁ？」

隣のちょっと軽そうなこいつは、僕の幼馴染兼、親友。

黒のウェーブ気味の髪、鋭いながらも冷たく感じられない眼。昔からいる僕でさえも、イケメンだと思うのに、世の女の子達がそう思わないわけがない。実際モテてるのな、こいつ……。

「だね。夏が恋しいよ」

「そんなことといって、夏がきたら反対のこと言うくせに」

「そりゃそうだ。ははは。丁度いい温度調整位、神様なら出来るはずなのにねぇ」

「そんなにヒマじゃねぇんじゃねぇーの？」

ははは。と笑いあう。なんていつも通りで、平凡で、楽しいんだろ。

「で、どこいくんだっけ？」

僕の問いに、幼馴染が答えた。

「ナンパ、行こうぜ？！」

「はぁっ？翔はいいかもしんないけど、僕なんか……」

あ、言い忘れてたけど、こいつの名前は国重（くにしげ）　翔（しょう）。
僕は黒川（くろかわ）　結兎（ゆう）。
「あぁん？お前、結構女子人気高いぜぇ？俺には勝てないがねぇ」
ははははっ、と肩を叩かれる。
「ど、どこが……」
「可愛い、だってさ。あ、言い忘れてたけど、男子人気入れたら俺の人気を超えてるかもな」
「忘れててよぉ！」
可愛い、はよく言われる……。中性的な顔立ち、なんてよくいうけど、僕のは女性的な顔立ちらしい。
それに、さして大きくないので、愛玩動物……いや、哀願動物として扱われている。
「よしっ！すぐさま駅前にＧＯ！」
「待って！」
僕は走っていこうとする翔の手をつかんだ。
「なんだ？拒否ろうなんて、そうは問屋が大根おろしだぜぇ！」
「意味わからないよぉっ！そうじゃなくて、駅前はナンパに向いてないよ？急いでいる人が多いから。街の方が得策だと僕は思うな」
って、何言ってるんだ、僕！
ナンパに賛成みたいじゃないかっ！
「おう！そうかっ！さっすが、男の娘！乙女心が分かるんだなっ！」
「違うよ！男の娘でもないし、乙女心も関係ない！」
さあ、行くぜ！と手を引かれたまま、僕は幸福を感じていた。

1.

「ねぇねぇ！なんでこんなに肌もちもちなの？」
「洗顔は何つかってる？」
僕はいつも通り、女の子たちに絡まれていた。

「せ、洗顔は、つ、使ってない」
現状、頬を摘まれ、グルグルまわされている。
頬が離され、びよーんと元に戻る。
「使ってない？それは聞き捨てなりませんなぁ！そういう子には罰を……」
そこで女の子は隣の子にアイコンタクトをとった。
「あたえましょーう！」
ぐにゅぎゅうーぱんっにゅーぱんっむにむにー。
全く、なんの描写か分からないっ！
「よしっ！今日はここまでにしとこっ。さぁ、ＨＲはじまるよぉ！席についてぇ～」
なんと、さっきまで僕を弄んでいたのは委員長だった！！
「お前も大変だなぁ？」
唐突に、斜めから声が飛んできた。
うーん、富士川という名前の男子生徒だったはず、確か。
「う、うん……」
しかし、僕の応答を無視し、富士川くんは続けた。
「ぺったんも、やっぱり需要はあるなっ！うんっ！」
「だよねぇ？でももうちょっとだけほしいかな」
僕の隣の席の岡元さんも加勢してくる。
「ねぇ、もうちょっと成長できるかなぁ？ゆうゆう」
そういうと岡元さんは僕の胸元をぺしっと叩いた。
そこで我慢できなくなって叫んだ！つもりなんだけど、二人にしか聞こえてなかった。
「僕は男の子だっ！」
『男の娘？』
二人の顔がニヤリとゆがめられた。
してやられた……。僕は机に倒れこむ。
ぐでーんと机に突っ伏したまま、僕はある女の子をみた。
形容するとお姫様。野薔薇に囲まれ、憂いの表情を見せるお姫様。

しなやかな髪をたずさえた、お姫様。
十三年間、見続けた顔。どうして、こんなにも飽きないものなんだろうか……。……風間　影利。

2.

「俺は風間が好きだっ！」
真剣な顔で俺を見つめてくる翔。
衝撃が脳を連打する。揺れる。ゆれる。ユレル……。
「そ、そう！」
声がうわずりながらも、表面上は笑顔をつくる。
「今までの恋とはまるで違う。本当の恋なんだ！だから、風間の幼馴染である、お前に相談したんだ！どうすればいいと思う？俺はわからねぇから！あいつのこと！」
ん？矛盾すると思った？翔と僕が幼馴染だったら、僕の幼馴染である影利も翔の幼馴染になるはずって？
確かに。でも、違う。二人は僕の幼馴染だ。でもその二人は違う。
僕が上手い具合に付き合っていたせいで、二人はこの学校で会うまで、お互いの存在を知らなかった。うん、全部僕の恐れによって……。
「ぼ、僕にも分からない……。恋愛方面のことは……。ごめん」
嘘はついていない。知らないのだった。
ずっと、逃げてきたから……。
「いいっていいって！お前のせいじゃないもんな？あ、ごめん、もういくわっ！じゃな！」
騒々しく去っていく彼を見つめながら、僕は虚無の海へと航海をしていた。後悔、でもあるかな？

3.

――どうやら、神様は僕を嫌っているらしい……。

「私……。国重君のことが好きっ……」

寒空の下、彼女は暑そうなほど顔を真っ赤にして告白した。

……僕に……。

「……え、な、なんだって？」

もう一度、聞きたかったわけじゃなかった。

でも、口が勝手に喋っていた。

「私！国重君が、好きっ！」

ところどころ小さくなりながらも、彼女にしてはとても大きな声で告白した。

「そ、そう……、上手くいくよ、きっと。影利、きれいだし……」

「ちがうのっ！そういう、好きになってほしいわけじゃないのっ！心を、好きになってもらいたいのっ！」

彼女は本気だった。愛。だった。

だから、僕は沈黙しか出来なかった……。

我慢できなくなって去っていく背中を見つめながら、僕は降り積もった雪の上に倒れこんだ。

「ほんと、嫌になっちゃうよ……」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2164y/

ほんと、嫌になっちゃうよ……

2011年11月4日20時11分発行